

Money on the Road Nov. 10, 2012 – May 12, 2013



企画展
おかね
道中記
— 旅で使う貨幣 —



貨幣博物館

日本銀行金融研究所
CURRENCY MUSEUM

古都観光のため、交通費1万3000円、宿泊費6000円、お土産代600円……そんな旅の記録を書いたことはありませんか？

江戸時代にも旅人は道中の支払いなどを、大井川渡し320文、宿泊代200文……と記録していました。

古代に国家が銭貨を発行して以降、貨幣制度の移り変わりとともに、旅におけるお金の使われ方も変化してきました。

古代や中世の旅は、主に年貢の運搬や商売のためで、中世には年貢の換金や商品の売買のための市が交通の要衝で発達するようになります。江戸時代後期になると、交通網の整備や農村への貨幣経済の浸透により、庶民の寺社参詣・物見遊山の旅が盛んになります。

本企画展では、当館で所蔵する貨幣や旅に関する古文書、絵画などにより、古代〜近代初期までの旅で、お金がどのように使われていたかをご紹介します。

日本銀行金融研究所 貨幣博物館

目次

展示内容	頁
旅で使うお金の移り変わり	3
古代の旅とおかね	4
中世の旅とおかね	5
近世の旅とおかね	8
近代初期の旅とおかね	26
主な展示資料	30
主な参考文献	31

旅で使う お金の 移り変わり

		主な旅の目的	旅で使うお金	お金の発行主体	主な旅のスタイル			
					交通路	宿泊	移動	食事
古代	朝廷・貴族	寺社参詣 職務(地方への赴任)	銭貨 (10世紀半ば発行途絶える) 米、布	朝廷	五街道・宿駅の整備 関の設置	寺社 野宿	徒歩 馬 牛車 船 輿	朝晩 2食
	庶民	労役 (年貢の貢納・防人) 商業						
中世	朝廷・幕府	寺社参詣 職務(地方への赴任) 軍事	銭貨	(渡来銭)	東海道の整備 関銭(通行料)徴収	寺社 宿 旅籠	徒歩 馬 牛車 船 輿	朝晩2食 →3食 (中世後期)
	庶民	年貢の貢納 商業 寺社参詣						
近世	幕府・藩	将軍上洛 参勤交代 など	銭貨の発行・配付 金貨・銀貨・銭貨 三貨間の相場変動有	幕府	五街道・宿駅の整備 関所の通行料撤廃	本陣 旅籠 木賃宿	徒歩 船 馬 駕籠	朝昼晩 3食
	庶民	商業 寺社参詣・ 物見遊山 など	娯楽・レクリエーション性が強く (180末~)農村への貨幣経済浸透	全国共通通貨の発行・普及で旅が容易に	道が整備され安全な移動が可能に			
近代(初期)	政府	公用(巡幸など)	紙幣 硬貨(金・銀・銅貨) (為替)	硬貨：政府	鉄道網の整備	旅籠 木賃宿 旅館 ホテル	鉄道 蒸気船 人力車 馬車	朝昼晩 3食
	庶民	商業 観光 など	貨幣統一 	紙幣：政府・国立銀行 から日本銀行へ				



銭貨の発行と交通路の整備

律令国家は、交通路を整備し、税の運送や労役のために旅をする人に和同開珎（708年発行）を持たせた。10世紀半ばに、国家は銭貨発行をやめ、銭貨流通は途絶えた。旅人は、食糧などの必要物資を持ち運び、銭貨の代わりに米や布を使った。

古代の旅とおかね

古代の旅とお金

奈良時代

平安時代中期



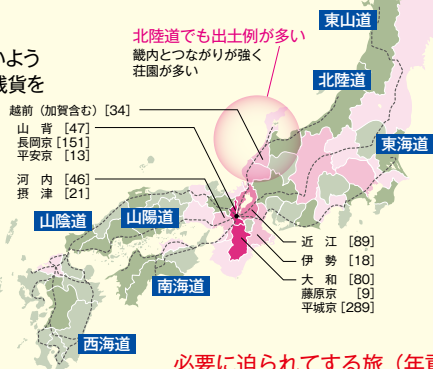
和同開珎・万年通宝・神功開宝
の主な出土状況

銭貨

旅人が困らないよう
旅先で使える銭貨を
持たせた



出土遺構数 (件)
1~4
5~
15~
80~
200~



北陸道でも出土例が多い
畿内とつながりが強く
荘園が多い

米・布

銭貨流通が途絶え、旅では
米・布・食糧を持ち運び

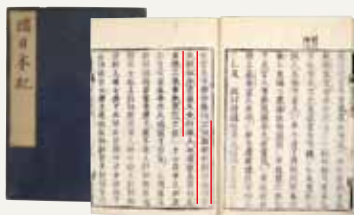


必要に迫られてする旅 (年貢貢納・軍事・信仰・商業など)

律令国家の銭貨発行と旅

『続日本紀』にみる旅で使う銭貨

律令国家は、旅人に銭貨を持たせて、移動中の食糧不足に対応することで運送の負担を軽くしようとした。



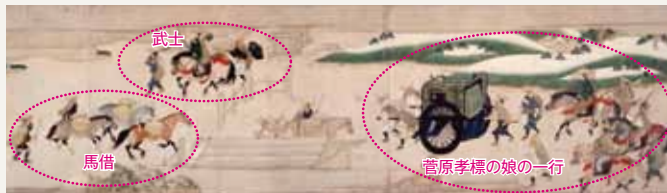
諸国の役夫や運脚が帰郷する時、食糧が少なくなっても誰にも伝えることができない。各地で食糧を準備し、銭を持たせて購入できるようにして、運送の負担を軽くする。

『続日本紀』 712 (和銅5) 年 10月 29日条

古代の旅と移動手段

近江 (滋賀県) と山城 (京都府) の境「逢坂の関」を行き交う人々が描かれている。

- 徒歩** 徒歩は時代を通じて主要な移動手段だった。
- 馬** 軍事的利用や輸送用にも馬は重要だった。
- 車** 牛がひく牛車と人がひく輦車があった。地方への長旅に女性が多く利用した。



『石山寺縁起繪巻』 第3巻 (石山寺所蔵)

朝廷・貴族の旅

主な目的 寺社参詣 (伊勢、熊野詣)
職務 (国司等への赴任) など

【院政期 (11~12世紀) の熊野詣】

天皇・上皇や貴族は、熊野詣をはじめ、寺社参詣に多額の旅費をかけ、寺社に多くの布施をした。



白河上皇 9回
鳥羽上皇 21回
後白河上皇 34回
後白河上皇の
寄進 (文治年間)
米 1,000石

庶民の旅

主な目的 労役 (雑徭・税の貢納・防人)
交易 など

【大和から越前への交易】

檜幡嶋は、大和大安寺で銭 30貫文を借りて越前敦賀で交易する。『日本書紀』 (中・24話)



【備後国内への買い出し】

品知牧人は、同国内の深津市まで正月用品を買いに行く。『日本書紀』 (下・27話)



古代には、律令国家によって和同開珎が発行され、旅先で銭貨を使って物資を手に入れる体制が整えられました。しかし、10世紀半ばには銭貨発行が途絶え、旅人は、貨幣として布・米を持ち運びました。

奈良・平安時代
七世紀後半~十二世紀後半



銭貨流通の浸透と旅での支払い

中世になると、交通の要衝では市や宿が発達した。

旅人は、銭貨を使って、旅先で必要なものを手に入れられるようになり、重い物資を運ぶ必要がなくなった。

中世の旅とお金

古代末期

米・布

旅で持ち運ぶには重い



中世

銭貨

旅人は旅先の市で物資を調達
宿泊や移動の体制が整う



全国共通
1枚=1文

中世末期

銭貨・金銀貨(領国貨幣)

地域ごとに異なった種類・価値の貨幣が流通



品質・種類・価値の異なる銭貨

両替の必要

鉱山開発によってつくられた金銀貨(領国貨幣)

必要に迫られてする旅(年貢貢納・軍事・信仰・商業など)

旅をしやすくした銭貨の浸透

旅がしやすくなった理由

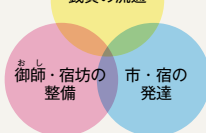
銭の効用は、米や布に勝る。旅人は銭を持てば重い食糧などを携帯せずに、千里の旅も容易にできる。真に便利なものだ。

『世宗莊憲大王実録』(15世紀)



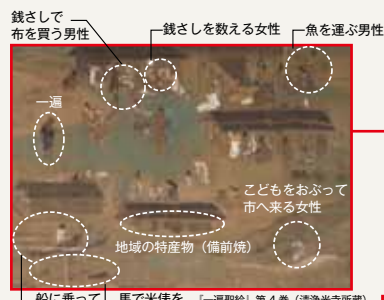
朝鮮使節がみた日本の貨幣流通の利便性

銭貨の流通



宿の周辺には市が立ち、周辺寺院は宿泊施設にもなった。

旅する人々と市



船に乗って馬で米俵を運ぶ男性

市へ集まって銭貨で取引をする人々
備前国福岡の市(岡山県瀬戸内市)

福岡の市は、河口に近く、船によって農産物や特産物が運ばれた。

一遍の旅した主な地域



伴野の市(長野県佐久市)
市は、日を決めて定期的に開かれた。使われていない市屋の中で一遍一行が休んでいる。

朝廷・貴族・武士の旅

主な目的

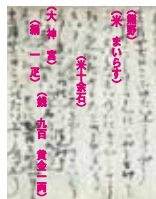
- 寺社参詣
- 軍事・訴訟
- 文学の旅
- 療養(温泉等)

【伊勢の有力者の信仰】

藤原実重は、伊勢・熊野などへ参詣し、多額の布施をした。実重の日記には、布施や寄進など信仰上の善行が日ごとに記されている。



善教寺阿弥陀如来立像(藤原実重作善日記)(善教寺所蔵(画像提供:四日市市立博物館))



1232(貞元)年
[熊野] 〇五部の大蔵經の供養
米 施入
〇経藏を聞くため
田 3段 寄進
〇参詣 米 10 余石、淨衣、祭料、白布 3 反半疋、白布 9 反
[伊勢神宮] 〇参詣 絹 1 疋、銭 900、黄金 1 両

実重の寄進した仏像と
その中から見つかった文書(一部)

庶民の旅 一旅をしながら生きる人々

主な目的

- 商業
- 運送・流通
- 年貢の貢納
- 寺社参詣

【運送・流通業者】

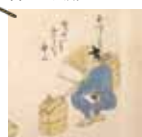
流通の拠点では、運送業者(馬借・車借など)が物流を支えた。



材木を運ぶ筏師

【商人・職人】

商人や職人は、旅をしながら品物を各地で販売した。



商売が繁盛し地元に戻ることでできない大山崎のあぶら売り

中世の旅とおかね

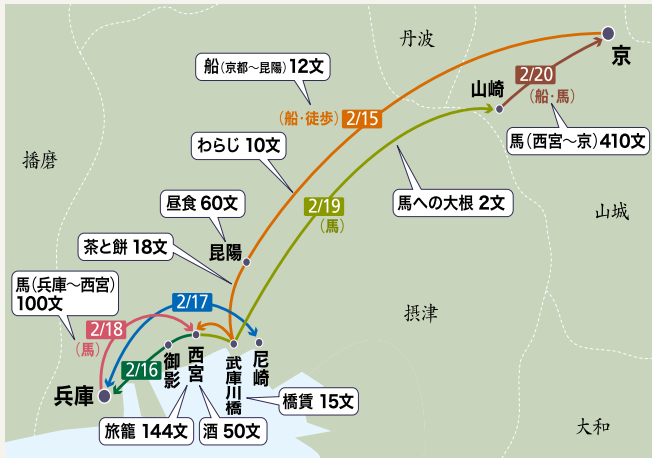
鎌倉・室町時代
十二世紀後半～十六世紀後半

中世には、中国から大量の銭貨が流入し、銭貨流通が盛んになりました。各地では、市や宿が生まれ、旅人は必要な物資を旅先で手に入れられるようになりました。

15・16世紀の旅とお金

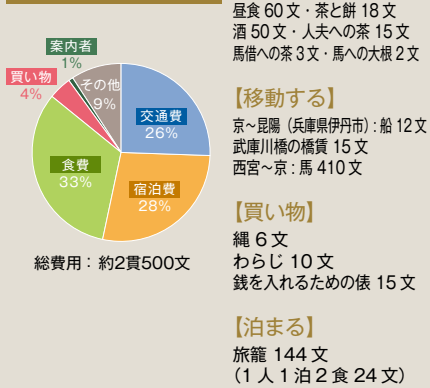
室町時代には、交通の発達につれて民間の宿が増加し、宿泊や人馬を供給する体制が整った。旅人は、銭貨を払うことで、旅先でさまざまなサービスが受けられるようになった。

○ 東寺使者の年貢徴収の旅

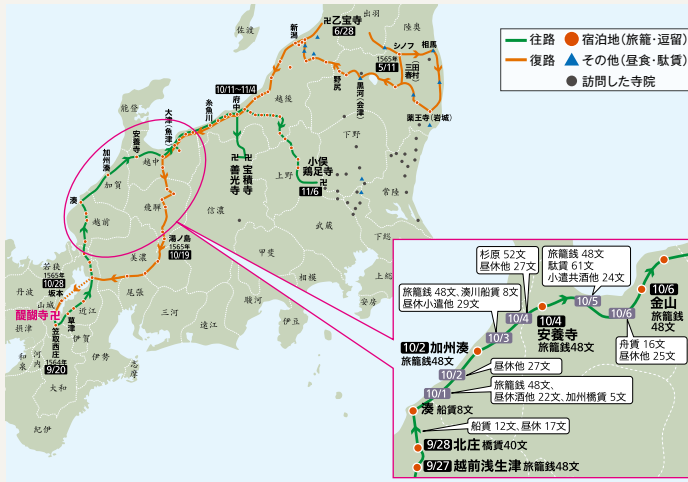


旅人 東寺の僧5名と人夫
期間 1419(応永26)年2月15日～20日
移動範囲 京から兵庫に行き、周防国美和荘(山口県岩国市)からの年貢を受取り、京へ帰る

東寺使者の旅費内訳

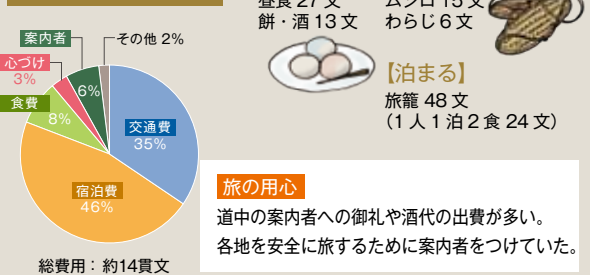


○ 醍醐寺僧の東国への旅



旅人 醍醐寺の僧2名
期間 1563(永禄6)年9月20日～
1564(永禄7)年10月28日
移動範囲 京から越後を經由して、東国を旅し、京へ帰る

醍醐寺僧の旅費内訳



16世紀後半の旅とお金

16世紀後半になると、地域によって異なる価値の銭貨が流通した。旅人は、金や銀を予め準備し、途中で両替をしながら旅をするようになった。

○ 16世紀末の武士の旅



旅人 常陸(茨城県)の武士大和田重清(佐竹氏の家臣)
期間 1593(文禄2)年8月18日～閏9月6日
移動範囲 佐竹義宣の命令で在陣していた名護屋(佐賀県唐津市)から常陸へ帰る

移動する

関門海峡 : 船賃4匁(馬、荷物など合計)
⇒銀(1匁=3.75g)で支払い
宮内～香登: 馬28文
⇒びた銭で支払い

泊まる

【旅籠: 食事付き 木賃: 薪代を支払い自炊】
下関訪問の旅籠代104文 } びた銭で
望月宿の木賃代56文 } 支払い

買い物

名護屋 在陣時
南蛮渡来品を購入
石けん(しゃぼん)2個 銀5匁
髪どめ25本 銀1匁
針2束3000本 銀5匁2分
香(檀香)3斤 銀45匁

京
反物類を購入
反物(しじら)5反 銀65匁
反物(綿)6反 銀87匁7分



◆ 古代に使われたお金



承和昌宝 (835年)



富寿神宝 (818年)



隆平永宝 (796年)



神功開宝 (765年)



万年通宝 (760年)



和同開珎 (708年)



乾元大宝 (958年)



延喜通宝 (907年)



寛平大宝 (890年)



貞観永宝 (870年)



饒益神宝 (859年)



長年大宝 (848年)

古代銭貨



『続日本紀』 797(延暦16)年 完成 904013
713(和銅6)年3月19日条

712(和銅5)年10月、諸国の運脚夫や役夫(防人など)が帰郷する際、食糧不足から餓死しないように、銭貨を持たせて途中で食糧を購入できるようにした。
翌713(和銅6)年3月には、旅人に一袋の銭を持たせるとともに、国司や郡司に対し、旅人が途中で米を買えるように準備させた。
985(寛和元)年頃の記録に、「世の中で貨幣が使われず、交易で使うことができないため、人々は嘆いている」と記されている(『本朝世紀』)。その後、銭貨の代わりに米や布が貨幣として使用された。

◆ 中世に使われたお金



開元通宝 (唐)



元祐通宝 (北宋)



熙寧元宝 (北宋)



元豊通宝 (北宋)



皇宋通宝 (北宋)



聖宋元宝 (北宋)



政和通宝 (北宋)



紹聖元宝 (北宋)



天聖元宝 (北宋)



永樂通宝 (明)

渡来銭(国内大量出土銭の上位10位の銭貨)



鑄写銭(模倣銭・私鑄銭)

中世には、中国からもたらされた渡来銭が1枚=1文で通用した。旅先では、銭貨をもっていれば、市などで必要なものを購入することができた。
14世紀半ば以降、渡来銭をまねた模倣銭や私鑄銭が作られ、質の異なる銭貨が流通するようになった。そのため、銭貨1枚=1文であった銭貨の特徴が崩れ、貨幣流通は混乱した。
16世紀に入ると石見銀山をはじめとして、戦国大名による鉱山開発が盛んになり、甲州金や石州銀などの金貨・銀貨が生まれた。



石州銀 (16世紀)



甲州金 (16世紀)



蛭藻金 (16世紀)

金銀貨



〈参考資料〉賽銭箱 956028

伊勢で使われたとされる賽銭箱。
中世、賽銭は「散銭」とも呼ばれ、銭貨の使用と寺社への参詣が浸透すると、仏像などの信仰対象へ銭貨が投げられるようになった。信仰の旅の拡がりとともに増加する賽銭は、寺社関係者の貴重な収入源となった。

◆ 信仰の旅



全国で使えるお金の発行と旅

江戸幕府は全国で使える金貨・銀貨・銭貨を発行した。

人々は、金・銀貨を少しずつ銭貨に両替しながら、旅ができるようになった。

近世の旅とおかね

近世の旅とお金

中世

銭貨

旅で持ち運ぶには重く、長旅に不向き (4 貫文 = 約 15kg)

旅のネック



● 関所での通行料 (関銭)・・・負担大

必要に迫られてする旅

近世

金貨・銀貨・銭貨

全国で使える幕府発行の金銀貨を銭貨に少しずつ両替し旅をした

藩札

各地域内だけで流通
そこから出ると使えない不便さ



信長・秀吉による関所の撤廃



● 関所での通行料なし・・・負担小 (軍事・警察目的で設置)

必要に迫られてする旅 + 娯楽性の強い旅へ (寺社参詣・物見遊山など)

街道整備の一環としての「寛永通宝」

さまざまな銭貨が街道での支払い手段として使われていたが、価値が不安定で量も不足していた。そこで江戸幕府は、街道整備の一環として、全国で使える銭貨「寛永通宝」を発行した。

街道・宿場の整備

全国統治し、荷馬賃・人足賃・川渡し賃などを定める

幕府の交通支配の確立



交通量の増大

将軍・大御所の上洛
・将軍家光上洛(1634年)
・参勤交代の制度化(1635年)

街道の支払い手段としての銭貨の流通が増す

量・質が不安定

- 銭相場上昇
- 街道沿いで銭不足
- 撰銭行為

地域によって異なる価値のさまざまな銭貨

「所々に其国々銭別々にて、衆人迷惑」
(徳川家史料、1632年)

撰銭令
(街道筋、将軍上洛の際など)



京都・五条大橋 「洛中洛外図屏風」(舟木本)重文 (東京国立博物館所蔵)
交通量の多い橋詰の銭屋(17世紀初)



街道の起点 日本橋

寛永通宝の発行

1636(寛永13)年発行開始
量・質の安定供給



東海道・中山道など古銭配布

1636(寛永13)年
寛永通宝が普及するまでの間、街道での公定相場(金1両=銭4貫文)を維持するため配布。

- 東海道: 箱根宿 (100 貫文)
浜松宿 (200 貫文)
- 中山道: 関ヶ原宿 (60 貫文) など

幕府の平和的軍事パレードと銭貨の発行

江戸幕府は、将軍の上洛や日光東照宮への参詣を通じて威厳を誇示した。将軍が移動する時には、支払いのための銭貨が大量に必要であった。



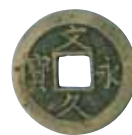
1728年 日光社参と銭座の設置

将軍の日光社参の際、銭貨を負担するので難波銭座の設置を許可してほしいとの届けが出された。



1863年 上洛と文久永宝発行

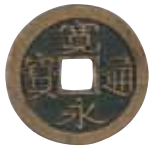
将軍の最後のの上洛の際、東海道沿いの宿場に配布。



江戸時代
十七世紀～十九世紀半

江戸時代になり、全国で使える金貨・銀貨・銭貨が発行され、旅人は安心して支払いができるようになりました。

◆ 近世に使われたお金



寛永通宝(1636年)



江戸幕府発行・
慶長金銀貨(1601年)



近世初期に使われたお金



文久永宝(四文銭)



寛永通宝(四文銭)



二朱銀



丁銀・豆板銀



一分金



二朱金



小判(1両)



一朱金



四貫文緋



百文緋

近世に使われたお金

現金払いの“旅の空間”

江戸時代、人々の日常の買い物は、帳簿につけて纏めて支払う“節季払い”、“付け払い”が広く行われていた。また、商人の間では為替による支払いなどが日常的に行われていた。

しかし、街道では旅人は買い物の都度、現金により支払いをした。旅は、日常の買い物とは異なる現金払いの空間であった。

近世の旅とあかね
大名の旅
参勤交代と現金輸送

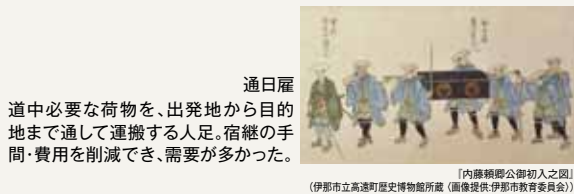
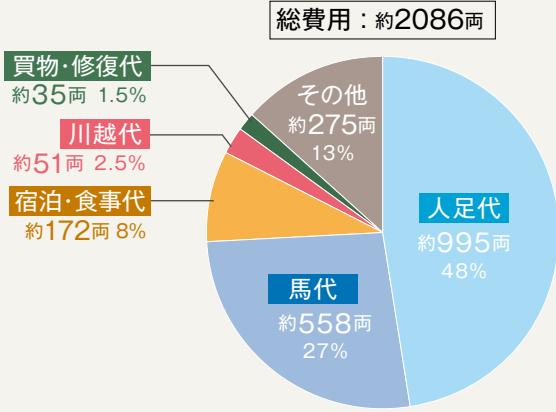
参勤交代に要する莫大な費用

江戸時代、諸大名は参勤交代で国許と江戸を行き来する際に、人足代・宿泊代の支払いなど莫大な現金を必要とした。

参勤交代の帰国費用 鳥取藩の事例

参勤交代費は藩財政の大きな割合を占めた。

旅人 鳥取藩主一行
時期 1810(文化7)年



参勤交代の支払い

【休憩する】萩藩の事例

旅人 萩藩主一行
実施日 1811(文化8)年3月22日
場所 二川宿(愛知県)本陣



休憩代：金100疋(金1分)



食事代：金300疋(金3分) 銭142文
握り飯と香の物(30人分)



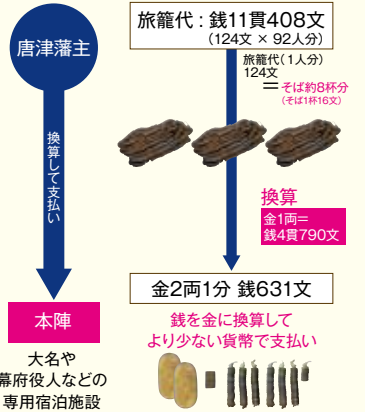
御礼：金100疋(金1分)
本陣から献上のほうぼう3匹の御礼

【泊まる】唐津藩の事例

旅人 唐津藩主一行
実施日 1775(安永4)年間12月5日
場所 矢掛宿(岡山県)本陣



本陣の様子



大量のお金を持ち運ぶ

1834(天保5)年、加賀藩主一行が国許に帰国する際の道中の費用は、金貨と銀貨で持参した。

道中の貨幣輸送 加賀藩の事例



【江戸出発時の持参貨幣内訳】



貨幣は長持に入れられ数名の人足が担いだ

金貨・銀貨で持ち運び

重さ 約 83 kg

この年は物価が高く、多めに貨幣を持参。

全て銭で運ぶと

約 33t (9,100貫文)

(公定相場で計算)

◆旅での買い物

—ものの値段—



「御上使様就御通諸色値段付帳」 今石動町
1761(宝暦11)年4月 910019

この帳面は、上使(江戸幕府から諸大名に上意を伝えるため派遣した使者)の通行に際し、越中国砺波郡今石動町いまいすどうの町年寄らが米・大豆・蠟燭・薪などの値段と金銀銭相場を書き上げたもの。

史料に書き上げられた主な値段

品名	単位／種類	値段
米	1石	銀 32 匁 5 分
白米	1 升 (上／中)	銭 28 文／銭 26 文
うどん	150 目	銀 1 匁
そば	150 目	銀 1 匁
上酒	1 升／1 合	銀 8 分／銭 5 文
醤油	1 升	銀 9 分 5 厘
山のいも	1 本	銭 20 ～ 35 文
だいこん	1 本	銭 2 文
ごぼう	1 本	銭 3 文
梅干	1 個	銭 2 文
栗	1 個	銭 4 文
わかめ	100 目	銭 6 文
かつおぶし	1 本	銭 20 文
草履	1 足 (上／並)	銭 10 文／銭 4 文
わらじ	1 足 (上／並)	銭 5 文／銭 3 文
白箸	100 膳 (上／中／下)	銭 70 文／銭 50 文／銭 35 文



「覚(垣内宿諸品相場定)」 1830(文政13)年 910040

垣内宿(三重県津市白山町垣内)の旅籠の宿泊料などの値段を定めたもの。垣内宿は初瀬街道(津から大和国初瀬<長谷寺の門前町>に向かう道)にあり、伊勢参詣の旅人で賑わった。

垣内宿諸品相場定

品名	単位／種類	値段
馬 2 人 乗	1 駄 1 里	148 文
駕籠 (かご)	1 挺 1 里	148 文
銭相場	2 朱	816 文
白米	1 斗	116 文
旅籠	上	148 文
〃	中	124 文
木賃 (きちん)	上	45 文
〃	中	32 文
わらじ	1 足	14 文

旅にかかるお金

	歩く (わらじ 1 足)	食べる (茶)	泊まる (1 人 1 泊 2 食)
中世 (歴博データベース) ※ 15 世紀前半	10 ～ 12 文 (5 ～ 6 人分?)	3 ～ 7 文 (5 ～ 6 人分?)	24 文
近世 「道中入用帳」 1830 年	12 文	6 ～ 8 文	200 文
近代 「道中諸入用覚帳」 1882 年	2 銭	1 銭	70 ～ 100 銭

※ 国立歴史民俗博物館「古代・中世都市生活史(物価)データベース」参照

近世の旅とあかね

庶民の旅ブーム

参詣・物見遊山

江戸時代後期（特に19世紀初頭）になると、農業における商品生産が広がり、農村へもお金が行き渡るようになった。また、舟運・旅宿の便もよくなり、名所図会などのガイドブックも盛んに出版された。そして、全国各地の寺社参詣を名目として名所旧蹟を巡る旅が庶民の間で盛んになった。

参詣の旅の楽しみ

貨幣経済の農村への浸透
農業における商品生産

経済的なゆとり

参詣・物見遊山・湯治など
“楽しむ”旅行が盛んに

小額金銀貨の浸透

南鐐二朱銀（1772年～）

ガイドブック類

江戸後期以降盛んに刊行
『東海道名所図会』刊行（1797年）
『東海道中膝栗毛』刊行（1802年）



参詣の旅の楽しみ

伊勢神宮への道中の支払い



道中の名産品を食べ、景色を楽しみながら伊勢へと向かった。

旅人	ある旅人の記録「道中小遣帳」より
期間	1830（天保元）年（11日間）
移動範囲	武蔵～伊勢（東海道）

名産品を

【食べる】

昼食 64文
まんじゅう 8文
あべ川もち 25文
わらび餅 32文

【買い物など】

わらじ 12文
髪結 32文

【泊まる】

旅籠 1人1泊2食
200～250文

【移動する】

馬之代 200文
大井川渡し 320文
天龍川船渡し 36文

【お参り】

箱根権現賽銭 6文
熱田神宮賽銭 5文



「本曾海道六拾九次之内賢川」（東京国立博物館所蔵）
旅籠の様子



旅の用心

巾着などは忘れやすいので高いところに置いてはいけない。宿代は夜渡さなくて、朝支払うのが良い。

浅井了意『東海道名所記』（17世紀）

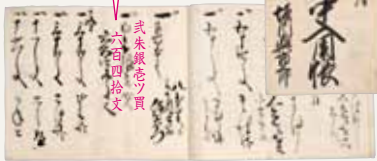
お金を持ち運ぶ 一両替をしながら旅をする

【両替】

手持ちの金貨・銀貨を銭貨に両替し、食事代などを払った。



640枚



道中入用帳



銭両替「銭小うり」の看板

旅人は旅籠や両替屋などで両替をした。両替相場は場所・時期によって異なった。

旅の用心

金銀を銭に両替するとき、人に頼むと悪質な銀にすり替えられることがあるから、銭を取り寄せてから渡すのが良い。

浅井了意『東海道名所記』（17世紀）

【財布】

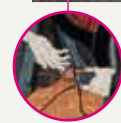
旅人は盗難にあわないよう、金銀貨と銭貨の財布を使い分けるなど工夫した。



早道：腰から下げた小銭入れ
脇差に見せて小判を隠して旅をした



「成田山参詣小金ヶ原之図」
成田山参詣への道程



銭さし

旅の用心

道中路金銭所持するには胴財布に入れておくのが良い。日々の入用は懐中へ小出しして使うのが良い。但し、小出しする時は夜でも人目につかないよう心懸る事が肝要である。

八隅 蓮庵『旅行用心集』（1810年）

◆ 寺社参詣の旅



「成田山参詣小金原之図」 歌川国貞 1855(安政2)年 900321

成田山新勝寺(千葉県)へ向かう旅人が、銭を束ねた緋から銭を落としている場面。成田山は、18世紀初頭から、江戸へ出張しての布教活動(「江戸出開帳」)を積極的に行い、信仰を集めていく。19世紀に入ると、江戸から3泊4日での成田山参詣の旅が盛んとなった。背景の小金原(千葉県北西部)は、江戸時代には、馬の放牧場が置かれ、將軍の狩獵場ともなった。



部分拡大



「王子稻荷参詣群集之図」 歌川国貞 江戸時代 900396

飛鳥山(東京都北区)が花見の名所になると共に、18世紀半ばから隣接する王子稻荷への参詣者が増加した。周辺に料理屋・茶屋が多く並び、江戸の人々に親しまれた行楽地であった。関東の稻荷社の「総司」といわれ、『江戸名所図会』(19世紀前半)にも「遠く江戸から離れているが、常に参詣人が絶えない」とある。



「奥州松島風景」 901025

江戸時代、地方の旅が盛んになると、松島(宮城県)は「三景」の1つとして記されるようになる。

松島は平安時代から、歌集・紀行などに登場し、訪れる人も多かった。



「讃州象頭山真景」 江戸時代 901113

“こんびらさん”として親しまれる金刀比羅宮(香川県)へ参詣する旅人と大黒・恵比寿。江戸後期、伊勢詣が盛んになると、京見物や金刀比羅宮参詣を含めたルートで旅をする人も多かった。金刀比羅宮は、海上の神として、特に漁民・廻船業者などにあつい信仰をうけた。

◆伊勢参詣の旅

— 銭を投げる —

伊勢神宮・内宮の参道口にある宇治橋（五十鈴川に架かる）の様子の絵画資料。江戸時代、宇治橋から参詣者が銭を投げ、それを橋の下で人々が網で受ける習慣があった。『東海道中膝栗毛』や各種道中記にも宇治橋の投銭の場面が書かれている。



「宇治橋」 900197



「宇治橋」 900196



宇治橋投銭を受けた網 963527



扇子(宇治橋投銭の図) 963522



(宇治橋投銭の図)〈部分〉 901551



(伊勢間の山 お杉お玉の図) 901544

「お杉お玉」は、伊勢神宮の外宮と内宮の間にある「間の山」の芸人。三味線などに合わせ、歌い踊り、参詣者の投げる銭をうまくよけて、銭を求めた。



「伊勢土産 あいの山」うちわ絵 901207

◆伊勢参詣の旅

— お金のかからない旅
御蔭参り —

江戸時代、伊勢神宮への熱狂的な集団参詣「御蔭参」が大凡60年周期で流行った。そういった参詣者には、沿道の富豪などは、金銭・物品などのほどこしや宿泊の世話をした。道中の支払いを記録する旅とは異なる伊勢参詣の在り方であった。



「伊勢名所御かけ参り」 貞秀 江戸時代後期 900195

御蔭参りでは老若男女が群をなして歩いた。1867(慶応3)年幕末の混乱の中で起きた民衆運動「ええじゃないか」は、伊勢神宮の信仰と結びつき、お札が降ると世の中が改まるといって、全国各地で群衆の狂乱的歌舞が行われた。



部分拡大



(裏)



「御蔭参驛路之賑」 橋本周延 1867(慶応3)年頃 900397

御蔭参り ひしゃく
1830(文政13)年使用
964003. 964004. 964005

御蔭参りでお金を持たずに出発した旅人は、ひしゃく1本だけを持って旅をする者が多く、施しを受けるための目印になっていたという。



部分拡大



「細見 伊勢図絵図」〈部分〉 1830(文政13)年 902317



「御蔭参の図」 1867(慶応3)年頃 901187



おかげ参り 幟 964010

「おかげ」と書かれている。

◆江戸名所見物

江戸には参勤交代で各地から武士や商人などが集まり、滞在中に江戸名所巡りをしたり土産を買い求めたりする者も多く、江戸の早い時期から名所案内や名所絵などが出版された。



「東都名所古跡神社仏閣独案内記」 1843(天保14)年 901259

江戸城を中心とし、日本橋を起点に東海道・中山道・甲州道中と街道が延びている。江戸の寺社案内が書かれており、江戸見物の人々のパンフレット(観光案内図)の役割を果たした。



「江戸名所之絵」 1803(享和3)年 902442

江戸城の背景に富士山がそびえ、中心部に五街道の起点である日本橋が描かれている。全国から江戸に集まった人々は、浅草・隅田川・日本橋などの名所巡りをして楽しんだ。江戸城・日本橋・富士山をセットで描く絵画は多く、旅人の江戸土産としても人気を集めた。



「分間江戸大絵図」 1864(元治元年)年 902258



部分拡大(王子稲荷周辺)

弥次・喜多の旅 十返舎一九『東海道中膝栗毛』 〈19世紀〉

“弥次さん・喜多さん”でおなじみの『東海道中膝栗毛』にもお金にまつわるエピソードが多く書かれている。その中から展示資料に関連した場面を紹介する。



弥次・喜多の道中支払い —大井川編—

肩車では危ないから、蓮台は2人で800文、という川越人足。弥次さんは問屋で直接交渉を思い立つ。侍に化けて乗り込み……

問屋 「お二人様なら蓮台で480文でございます」
 弥次 「それは高値じゃ。ちと値引きいたせ」
 問屋 「ええ、この川の賃金を負けるもないもんだ。…」

◆ 水上の旅

— 江戸時代
東海道の川越 —



「大井川徒行渡図」 1860(万延元)年 900272

大井川(静岡県)には橋はつくられず、東海道交通の難所とされていた。旅人が川を越えるためには川越人足の手助けが必要で、肩車や蓮台などの方法があった。人足の鉢巻に、川渡し賃にあたる川札が描かれている。



大井川 川札 914813.914814.914815

旅人は川札(金券)を買って川越人足に渡し、人足はこれを頭髪か鉢巻に結びつけて旅人を渡した。川越人足は、札場で川札を精算して賃金を受け取った。川越には肩車・蓮台などがあり、必要な川札の枚数が異なった。川札の値段は水かさによっても異なったが、歩行渡し(肩車)では約50~80文くらいが相場であった。

◆ 水上の旅

— 明治時代
蒸気船の登場 —



「泰平海世直競漕」 1885(明治18)年 900564

郵便汽船三菱会社と共同運輸会社の競争を中心に、明治初期に登場したさまざまな商品の競争の風刺画(3枚綴りのうちの2枚)。

中央には、三菱の蒸気船の下に鉄道馬車・乗合馬車(「圓太郎馬車」)・蒸気船(便利蒸気)。
左下には、沈もうとする江戸時代の天保通宝と、船の上の金銀貨・紙幣が描かれている。



(裏)

(裏)

蒸気船の乗船券 明治時代前期 914811.914812



「東京両国通運会社川蒸気往復盛栄真景之図」
明治時代前期 900260

明治政府による殖産興業政策の中で、河川交通には外輪式蒸気船が登場し、海運では従来の和船に加えて西洋式帆船や汽船が導入された。

1891(明治24)年には、東京から栃木県笹良橋までの川蒸気船の運賃が35銭であった。

◆両替

—旅でお金を持ち歩く—

江戸時代、道中の支払いは、錢貨での支払いが大半であった。旅人は軽くてかさばらない金銀貨を少しずつ錢貨に両替し、錢貨で少額の支払いをしながら旅をした。両替は旅籠屋や大きな都市の両替屋などで行った。



「道中入用帳」江戸時代後期
甲州道中3日間の旅での出費を記録した史料。1日目に金1分を1貫300文に両替している。



銭両替 看板 961047



「東京馬喰町三街目中屋旅亭開業図」 広重 明治時代初期 900171
旅籠(「旅人宿」)に併設された両替商が描かれている。江戸時代から、旅籠が両替商を兼ねている例は多くあった。また、旅籠に両替商が出入りして旅人の両替を行うこともあった。『東海道中膝栗毛』では、弥次・喜多が浜松の宿に入ると、「ぜにや(銭屋)」などが待っている場面があり、銭屋が「ハイ 両替はよぶおざりですか」と話しかけている。



「浪花名所図会 順慶町夜見世之図」 広重(初代) 江戸時代後期 900212
左上に「銭小うり」の看板が見える。順慶町は多くの夜店が建ち並び、複数の両替商がいたことが知られている。『東海道中膝栗毛』の弥次・喜多も、伊勢参詣のあと、京都・大坂見物の折に、順慶町に立ち寄っている。

外国人が見た江戸時代の旅の両替

「…我々は金貨の一枚を細かい銅貨に両替して、真ん中の四角い穴に紐に通した。…」

「(銭さしについて)……この銭の束は、町でも田舎でも、旅人用にしばしば店に用意してある。銭を数える時間を省いて、すぐに小銭に両替できるようにしているのである。……」

C.P. ツェンペリー:オランダ東インド会社医師
(C.P. ツェンペリー『江戸参府随行記』(18世紀)より)

中世・近世の両替の事例

16世紀末の両替『大和田重清日記』1593(文禄2)年

- 銀を錢に両替
 - [名護屋] 銀1匁=錢94文 銀110匁4分=錢10貫379文
 - [播磨] 銀1匁=錢100文 銀10匁5分=1貫50文
 - [京] 銀1匁=錢118文 銀24匁5分=2貫915文
- 金を銀に両替 金1匁=銀8匁7分 金13匁=銀112匁7分
- 金を錢に両替 金1匁=「より錢(撰錢)」[善錢]800文

18世紀の両替『御上使様就御通諸色値段付帳』1761(宝暦11)年4月

- 金を銀に両替 元文小判1兩=銀64匁6分
 - 銀を金に両替 銀64匁8分=元文小判1兩
- ※両替する場合には、手数料が含まれた。

◆道中日記

—旅のお金の支払い—

江戸時代、旅人は道中の支払いを記録した。支払いだけではなく、旅で見聞きしたさまざまなことを記した史料もある。



「道中日記」 江戸時代後期 910021



「道中小遣帳」 井本与八 1823(文政6)年

3月20日に、六郷の渡し(多摩川)を通り、東海道を旅して伊勢神宮へ。そして再び東海道を戻り、4月27日に旅を終える間の支払いを記録した史料。



「五十三次内 程かや」 1854(安政元)年 901247

中央に錢摺が描かれている。「弥二」「喜太八」の名前があり、程ヶ谷の場面として描かれているが、「東海道中膝栗毛」では追分(三重県四日市市)の場面。

盗人に追分なれやまんぢうのあんのほかなる初尾(初穂)とられて
 弥次は茶屋で、金比羅参りの格好をした「手品つかひ」に一杯食わされ、まんじゅうの大食い競争となり、金比羅様への初穂料300文とまんじゅう代233文を払うことになる。

旅の用心 心付け

「道中第一の用心には、堪忍にまさる事はない。船頭・馬かた・牛遣などは、口やかましく、わがままな者なので、これに負けないようにすると、大事の原因となる。

今錢二、三文をたかくつかへば、万事はやくとどのう」

(浅井了意『東海道名所記』(17世紀)より)

弥次・喜多の道中支払い —安倍川編—

安倍川(静岡県)の人足が待ち構えていて、料金の交渉。昨日の雨で水嵩が高いから、1人64文で交渉し、2人を肩車し川へ入る。確かに水勢も強く、深い。やっと対岸について安堵する。肩車から降りて賃金をやる。
 弥次「それ、別に酒手が16文ずつ」(酒手:チップ、心付け)
 人足「へい、これはおおきにありがとうございやす」……



(『東海道中膝栗毛』より)

◆移動にかかるお金 — 公用の旅 —

江戸時代、幕府・藩は、五街道を中心とする諸街道を幕府役人、大名等の公用通行のために整備した。幕府役人、大名等は公用で通行する際、各宿駅に常備された人足や馬を、無賃あるいは、一般より安い「御定賃銭」（幕府が定めた料金）で利用できた。





「從加州金澤至武州江戸下通山川駅路之図」 1712(正徳2)年 902508

金沢から追分宿(長野県)までの北国街道と、追分宿から江戸までの中山道を1里(約4km)=1寸(約3cm)の縮尺で描いた図。宿駅間の距離と駄賃、山、川など移動に必要な情報が記されている。絵巻の経路は、加賀藩主の参勤交代の際に頻繁に利用された。

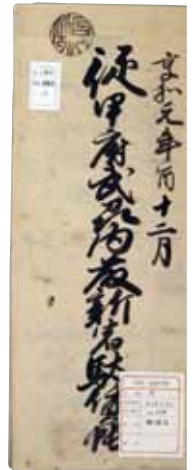




一百七拾貳文 人足六人
 志人廿八文ツツ
 一五拾三文 本馬志足
 弍貳百廿九文
 從猿橋下鳥沢迄
 十二月廿五日 問屋 八左衛門 印
 一貳百五拾四文 人足六人
 志人四拾壹文宛
 一八拾四文 本馬一疋
 弍三百四拾貳文
 右者下鳥沢方犬目迄
 十二月廿五日 問屋 九右衛門 印



「從甲府武州内藤新宿迄駄賃帳」 1801(享和元)年12月 908327
 甲府から江戸まで道中27宿の間、人足6人と本馬1匹を「御定賃銭」で利用した史料。宿駅人馬の利用は、宿ごとに人馬を交換する「宿継」が原則であり、各宿場で本史料を問屋に提示し、問屋が賃銭を記し、領収印を押した。合計銭8貫135文であった。



荷物の運送方法と重さによる料金の違い

種類	荷物の重さ	(例) 中山道 浦和宿～大宮宿 の料金 (1711(正徳元)年の「御定賃銭」)
本馬	荷物 40 貫 (150kg) まで	49 文
軽尻	人 1 人と荷物 5 貫 (約 19kg) まで または荷物 20 貫 (75kg) まで	34 文 (本馬の 6～7 割弱程度)
人足	荷物 5 貫 (約 19kg) まで	25 文 (本馬の 5 割程度)

弥次・喜多の道中支払い —庶民の駄賃交渉—

馬 方 「その旦那衆、戻り馬に乗ってくださいますか」
 弥 二 「ようし、よし」
 馬 方 「安くしましよ、たった百五十文で乗りませんか」
 弥 二 「ようし、よし」
 喜 多 「六十四文だったら乗ってみよう」
 馬 方 「それならやめましよう」

庶民などの一般の旅行者は、人足や馬の利用値段を、人足や馬方と交渉して決めた。“戻り馬”は通常より安かった。



◆宿場で発行されたお金

街道の宿場では、旅人による交通費（人馬賃）・宿泊費の支払い、人足や馬方へ渡す賃金など、小額貨幣が必要な場面が多くみられた。しかし、幕末から明治初期にかけて、物価高騰と貨幣制度の混乱により、宿場では小額貨幣が不足していた。このため、中山道などの各宿では、宿場限りあるいは近隣の複数の宿で通用する紙幣を発行した。



部分拡大

「木曾街道六十九次之内奈良井おろく善吉」
国芳 1852(嘉永5)年 900216

「お六櫛」は、中山道木曾の藪原宿で生産された歯の細かい梳櫛で、江戸時代より木曾路の名産品として知られた。お六櫛は、中山道の藪原宿・奈良井宿などで旅のお土産として販売された。



(裏) 2銭 (裏) 1銭

藪原宿 櫛切手

櫛製造に携わる職人への賃金の支払いのために発行され、日用品の支払いに使われた。



(裏) 100文

中山道・長久保宿 銭札 1869(明治2)年

長久保宿は1869年7月、銭不足により、賃金や、釣銭の支払いに支障が出ているため、宿場限りの銭札発行を願い出た。発行は許可され、宿では4種(624・100・48・24文)の銭札を発行した。銭札は、人足や馬士が米や味噌などの日用品を購入するために使われた。

画像提供：長和町教育委員会



(裏) 5合 (裏) 3合 (裏) 1合

東海道・金谷宿 米札 1869(明治2)年

明治初期、金谷宿では、金属貨幣はしまい込まれ、小額貨幣が不足した。そのため、宿の役所では1869年5月頃から宿内限りで通用する小額面の米札を発行した。銭との換算は米1合札=100文、3合札=300文、5合札=500文と定められた。

はたご きちん 旅籠屋と木賃宿

旅籠屋：食事の付いた宿
木賃宿：旅人が食料を持参して薪代
＝木賃を宿屋に払う宿
本陣・脇本陣：参勤交代の大名などが
休憩・宿泊する施設



木賃宿の様子「東海道五十三次之内 水口」

草津市蔵中神コレクション 草津市立草津宿街道交流館所蔵



旅籠屋の様子「木曾海道六拾九次 贄川」

東京国立博物館所蔵

◆旅でお金を持ち歩く工夫

江戸時代、旅人は、お金の盗難などの危険を避けるため、お金を目立たないようにして持ち歩いた。巾着などの財布のほか、刀や鐏などに小さくて高額な金銀貨を入れられるような工夫がされた。



脇差型貨幣入れ 江戸時代 (1~4)

958273. 958286. 958281. 958284

外観は、脇差(小刀)で、小型の金銀貨などが入れられるように工夫されている。中が箱状になっているものや金銀貨の大きさに合わせて溝のあるものなど、さまざまな作りのものがある。



携帯用紙幣入れ 江戸~明治時代 958245

紙幣入れは、懐中には入れず、旅の荷物に入れて持ち歩いたものといわれている。



鐏型貨幣入れ 江戸時代 958289

刀の鐏の中に二分金などを入れられるようにつくられている。



早道 江戸~明治時代 958242

胴乱より小型で銭入れとして使用された。元禄期(1688-1704年)に佩物(腰に提げる袋など)の職人によりつくられたとされる。



胴乱 江戸~明治時代 958239

煙草入れや印籠のように腰に提げ、銭や薬などを入れた袋物。筒卯、銃卯ともよばれ、もともとは、鉄炮の弾丸入れとして用いられた。



「東海道五十三次細見図会 川崎」 広重(初代)
江戸時代後期 900209

東海道五十三次の川崎宿で乗り手待つ馬方が描かれている。馬方(左から2人目)の腰には、銭さし(紐で通した銭)がさげられている。



部分拡大



「東海道 程ヶ谷 其二」 芳艶
1863(文久3)年 900210

程ヶ谷宿(保土ヶ谷)で、参勤交代の人足たちは、雨宿りの間に博奕をしていた。雨が上がり、巾着を手に慌てて移動したため足元には銭が散らばっている。



部分拡大



「新板浮絵忠臣蔵 第五段目」 春翁 江戸時代末期～明治時代初期 900386

山崎街道(京～西宮間)で、山賊(斧定九郎)が与市兵衛の首にかけられた50両入りの財布を奪って、口にくわえ、与市兵衛に斬りかかる様子が描かれている。



部分拡大



通貨制度の統一と移動手段の発達

明治政府による通貨制度の整備の中で「円」が誕生し、1885年には日本銀行券が発行された。全国で使える紙幣が普及したことで、旅で持ち歩く貨幣も金銀貨に比べ軽量化した。

近代初期の旅とおかね

明治時代初期
十九世紀後半

明治時代に入り、近代的な貨幣制度が整備され、全国で使える紙幣が普及しました。

近代の旅とお金

近世

近代

金・銀・銭貨

両替相場は変動し、地域差もあり旅では不便



銭両替の看板

紙幣(藩札): 藩札は各藩通用のため、旅では普段使っている藩札は利用できず

全国通用紙幣

全国通用紙幣の発行により通貨価値の安定



1銭 5銭 20銭
一段と旅がしやすく

必要に迫られてする旅 + 娯楽性の強い旅へ (寺社参詣・物見遊山など)

近代通貨制度と旅

○全国的な貨幣・紙幣の統一と交通の活発化 …… 明治政府の殖産興業政策の中で、近代的産業・経済制度が整備。

《通貨制度》

1871年「円」の誕生

金銀銭貨・藩札 → 貨幣単位の統一

中央銀行の必要性

さまざまな紙幣の発行
貨幣制度の混乱

1882年 日本銀行設立

1885(明治18)年
日本銀行券の発行



軽量化

両替の必要のない貨幣が全国で使えるように旅で持ち歩く現金が軽量化

通貨価値の安定

金銀銭貨間のような価値の変動がなくなり、安心して旅ができるように

《交通制度》

運賃を支払えば誰でも利用できる
公共交通機関の誕生

宿駅伝馬制度・帆船 → 汽車・汽船へ

大量輸送・高速化

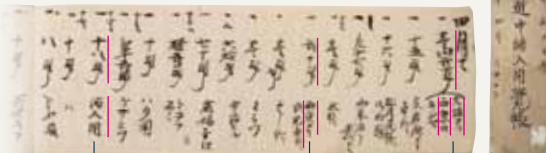
汽車
品川→横浜 35分
(東海道を歩くと約8時間)

経済活動の活発化
遠距離の移動がしやすく

旅でお金を使う

道中での支払い

明治時代になると、人々は汽車や人力車など新しい移動手段を使って旅をした。



酒入用 18銭

西京より伏見車代(人力車) 20銭

大坂より西京へ 汽車 1円20銭

1882(明治15)年 道中諸入用寛帳

【買い物など】

わらじ 1銭
草履 8文・2銭
かんざし 15銭
髪結 5銭

【泊まる】



1泊: 70~100銭

【移動する】

新しい旅のスタイル... 一方で歩いて巡る旅の楽しみは減少。



馬車: 東京~横浜 3円



人力車: 上野~本両替町 11銭



汽車: 東京~横浜 75銭(中等)

◆ 近代に使われたお金



1円金貨



50銭銀貨



2銭銅貨



1厘銅貨

新貨条例による貨幣
1871(明治4)年～



出雲広瀬藩札
銭500文→1銭4厘



伊勢桑名藩札
銀1匁→1銭3厘

新額面の大蔵省印を押した藩札
1872(明治5)年



民部省札 1朱札
1869(明治2)年



国立銀行紙幣 新券1円券 1877(明治10)年



日本銀行券 1円券 1885(明治18)年



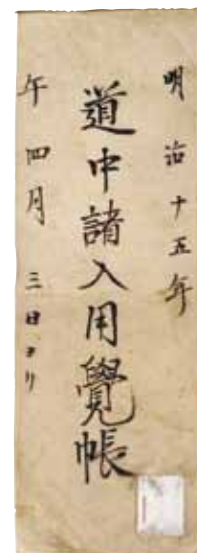
「三井呉服店陳列場の図」 1896(明治29)年 901283

「御買物の節は汽船汽車至る所に便利の今日、御出京の上御来店下され候へば…旅費などは忽ち御埋め合せ」とあり、汽船や汽車により交通の便がよくなり、遠方からも東京へ買い物にくることを期待している。



「道中諸入用覚帳」 1882(明治15)年4～5月 910024

鳥取から関西周辺への1ヶ月間の旅の支払いの記録。「円」が誕生した新貨条例(1871年)から10年以上が経ち、ほぼ全て円単位で記録されているが、「八文草履」との記録も見られる。



表紙

◆ 新しい移動手段
— 人力車 —



「東京真景図会 日本はしの繁栄」 広重 明治時代初期 900229



「五十三次日本橋」 明治時代前期 900230

人力車は、1870(明治3)年に東京府の許可を得て日本橋で開業したのが最初である。江戸時代までの駕籠などに代わり、移動手段として全国に普及した。当初運賃が定められておらず、車夫と乗客とのトラブルが多発したため、規則がつけられるようになった。

区	目的地	車賃
東區	芝浦	...
	有明	...
	豊洲	...
	本町	...
中區	本町	...
	上野	...
	池袋	...
	練馬	...
西區	西巣鴨	...
	板橋	...
	文京	...
	目黒	...
南區	新大塚	...
	池袋	...
	有明	...
	豊洲	...

「人力車定價表」 1887(明治20)年 911177

大阪の人力車の定價表。



「呉服店 松倉屋」うちわ絵 国政 明治時代前期 901211



「呉服店 宮崎屋」うちわ絵 房種 明治時代前期 901218



「呉服店 森田」うちわ絵 国政 明治時代前期 901213

人力車は急速に普及し、文明開化の象徴的な存在であったことから、当時の商家の宣伝媒体であるうちわ絵にも描かれた。

◆ 新しい移動手段

— 馬車 —



「馬車 告條」 青柳軒 明治時代初期 901317

1872(明治5)年に開業した鉄道(横浜～新橋)の利用客を汐留などで待ち受け、馬車で希望の場所へ運んだ。馬1頭牽きで、1里(約4km)2分(円換算で50銭)とある。



「東京名勝銀座之通煉化石商家之図」 1874(明治7)年 901234

1872(明治5)年に銀座の町の建設が始まり、翌年には、現在の銀座通りが完成した。乗合馬車は、1872年の宿駅制度廃止以後、各地に登場した。鉄道が普及するまで、東京から宇都宮まで1円96銭(1877年)など、長距離を走る乗合馬車があった。1882(明治15)年には、新橋と日本橋を結ぶ鉄道馬車が営業を開始した。

◆ 新しい移動手段

— 鉄道 —



「横浜往返鉄道蒸気車ヨリ海上之図」 広重 1874(明治7)年 900191

1872(明治5)年、日本初の鉄道が新橋～横浜間で開業した。



部分拡大



部分拡大



「toukiyow Sinagawa tetszdapwe jiyouki hatszsiya no zoe (東京品川鉄道蒸気発車之図)」 広重 1873(明治6)年 900188

開業した頃の鉄道錦絵は、運賃が両単位のものが多かったが、この絵は円単位で記されている。



「漫画旅行日本全図 第八図」 横山啓・井上精二 昭和時代初期 901474

鉄道網が広がりを見せ、路線図と併せて各地の名所・名産品が描かれ、運賃や距離・時間なども記されている。



鉄道乗車券 1885(明治18)年 914810
横浜～新橋 下等 運賃30銭

資料名	年代
古代	
○ 古代に使われたお金 古代銭貨(和同開珎ほか)	8~10世紀
続日本紀	8世紀完成
中世	
○ 中世に使われたお金 渡来銭(開元通宝・皇宋通宝ほか)	7~15世紀
鋳写銭	12~17世紀
石州銀	16世紀
甲州金	16世紀
蛭藻金	16世紀
〈参考資料〉賽銭箱	-
近世	
○ 近世初期に使われたお金 慶長金銀貨(小判・丁銀・豆板銀)	1601(慶長6)年
寛永通宝	1636(寛永13)年
○ 近世に使われたお金 小判・一分金・二朱金・一朱金	江戸時代
丁銀・豆板銀・二朱銀	江戸時代
寛永通宝・文久永宝	江戸時代
銭繒(百文繒)	江戸時代
(東海道道中間屋名本陣名書上)	1721(享保6)年
覚(垣内宿諸品相場定)	1830(文政13)年
讃州象頭山真景	江戸時代
成田山参詣 小金原之図	1855(安政2)年
王子稲荷参詣群集之図	江戸時代
奥州松島風景	-
宇治橋	-
宇治橋	-
(宇治橋投銭の図)	-
扇子(宇治橋投銭の図)	-
宇治橋投銭を受けた網	-
伊勢土産 あいの山	-
(伊勢間の山 お杉お玉の図)	-
(御蔭参の図)	1867(慶応3)年頃
御蔭参り ひしゃく	1830(文政13)年使用
伊勢名所御かけ参り	江戸時代後期
おかけ参り 轆	-
御蔭参驛路之賑	1867(慶応3)年頃
江戸名所之絵	1803(享和3)年
東都名所古跡神社仏閣独案内記	1843(天保14)年
大井川徒行渡図	1860(万延元)年
大井川 川札	-
道中入用帳	江戸時代後期
銭両替 看板	江戸時代
浪花名所図会 順慶町夜見世之図	江戸時代後期

資料名	年代
近世	
道中小遣帳	1823(文政6)年
道中日記	江戸時代後期
五十三次内 程かや	1854(安政元)年
従加州金澤至武州江戸下通山川駅路之図	1712(正徳2)年
従甲府武州内藤新宿迄駄賃帳	1801(享和元)年
木曾街道六十九次之内 奈良井おろく善吉	1852(嘉永5)年
脇差型貨幣入れ	江戸時代
鐔型貨幣入れ	江戸時代
胴乱	江戸~明治時代
早道	江戸~明治時代
携帯用紙幣入れ	江戸~明治時代
東海道五十三次細見図会 川崎	江戸時代後期
東海道 程ヶ谷 其二	1863(文久3)年
新板浮絵忠臣蔵 第五段目	江戸時代末期~明治時代初期
御上使様就御通諸色値段付帳	1761(宝暦11)年
近代初期	
○ 近代初期に使われたお金 民部省札・大蔵省印押捺藩札(桑名藩ほか)	1869(明治2)年~
金貨・銀貨・銅貨	1871(明治4)年~
国立銀行紙幣(新券)	1877(明治10)年
日本銀行券	1885(明治18)年
道中諸入用覚帳	1882(明治15)年
五十三次日本橋	明治時代前期
東京真景図会 日本はしの繁栄	明治時代初期
人力車定価表	1887(明治20)年
呉服店 松倉屋 うちわ絵	明治時代前期
呉服店 森田 うちわ絵	明治時代前期
呉服店 宮崎屋 うちわ絵	明治時代前期
馬車 告條	明治時代初期
東京名勝銀座之通煉化石商家之図	1874(明治7)年
横浜往返鉄道蒸気車ヨリ海上之図	1874(明治7)年
toukiyow Sinagawa tetszdapwe jiyouki hatszsiya no zoe (東京品川鉄道蒸気発車之図)	1873(明治6)年
鉄道乗車券(横浜~新橋)	1885(明治18)年
三井呉服店陳列場の図	1896(明治29)年
泰平海直競漕	1885(明治18)年
蒸気船の乗船券	明治時代前期
東京両国通運会社 川蒸気往復盛栄真景之図	明治時代前期
東京品川海辺蒸気車鉄道之真景	明治時代前期
東京八ツ山下蒸気車往返鉄道之全図	1872(明治5)年
東京汐留鉄道館蒸気車待合之図	1873(明治6)年
漫画旅行日本全図 第八図	昭和時代初期
東京馬喰町三街目中屋旅亭開業図	明治時代初期
遠江国金谷宿 米札	1869(明治2)年
信濃国藪原宿 櫛切手	-

◆主な参考文献

- 〔著書〕
 相田一郎「中世の関所」(吉川弘文館、1983年)
 赤坂憲雄ほか編「人とモノと道と」(岩波書店、2003年)
 荒井秀規ほか編「交通」(東京堂出版、2001年)
 大家健「中世越後の旅」(永禄六年北国下り遺足(野島出版、2003年))
 児玉幸多編「日本交通史」(吉川弘文館、1992年)
 栄原永遠男「日本古代銭貨研究」(清文堂出版、2011年)
 新城常三「新稿 社寺参詣の社会経済史的研究」(塙書房、1982年)
 新城常三「社寺と交通」(熊野詣と伊勢参り)(至文堂、1960年)
 新城市「庶民の旅の歴史」(日本放送出版協会、1971年)
 忠田敏男「参勤交代道中記」(加賀藩史料を読む)(平凡社、2003年)
 八十二文化財団編「信州の紙幣」(資料集、1995年)
 藤原良章、村井章介編「中世のみちと物流」(山川出版社、1999年)
 丸山雍成「日本近世交通史の研究」(吉川弘文館、1989年)
 森浩「門脇遺蹟」(旅の古代史)「道橋関をめぐって」(第6回春日井シンポジウム)(大巧社、1999年)
- 〔論文〕
 安藤正人「近世初期の街道と宿駅」(永原慶「ほか編」講座「日本技術の社会史」第8巻(交通運輸)日本評論社、1985年)
 加藤慶一郎「近世の旅と貨幣」(文化文政期の東海道を中心に)(奈良県立大学研究季報第1号、2007年)
 倉沢猛「宿場札について」(旧中山道長久保宿の場合)(『千曲』第51号、1986年)
 倉橋真司「藤原実重の信仰」(在地霊場の形成と展開)(『地方史研究』第50巻第6号、2000年)
 倉橋真司「善教寺阿弥陀如来立像胎内文書の基礎的考察」(その成立をめぐる心性)(『国史学』第167号、1999年)
 小島道裕「中世後期の旅と消費」(『永禄6年北国下り遺足帳』の支出と場)(『国立歴史民俗博物館研究報告』第13号、2004年)
 小栗田淳「文禄年間の中流武士の目録」(大和田近江重清日記について)(『神田博士還暦記念会編』書誌学論集・神田博士還暦記念・神田博士還暦記念会、1997年)
 高橋傑「周防国美和社兼行方」(年貢取扱いについて)(『東寺文書研究会編』『東寺文書の中世の諸相』思文閣、2011年)
 中井信彦「江戸時代の道中日記と銭相場」(『歴史研究』昭和41年7月号、1966年)
 藤井雅子「付法史料の語る醍醐寺無量寿院と東国寺院」(醍醐寺堯舜僧正の付法活動を通して)(『古文書研究』第51号、2000年)
 盛本昌広「大和田重清日記」(見る取引慣行)(『茨城県史研究』第89号、2005年)
 盛本昌広「戦国武士における贈答の世界」(大和田重清日記にみる)(『網野善彦』ほか編「民具と民俗」(下)ものがたり日本列島に生きた人々たち)(岩波書店、2000年)
 山本光正、小島道裕「永禄6年北国下り遺足帳」(資料紹介)(『国立歴史民俗博物館研究報告』39号、1992年)
- 〔史料集〕
 原田伴彦ほか編「日本都市生活史料集成8(宿場町篇)」(学習研究社、1977年)
 豊橋市「三川宿本陣資料館」(三川宿本陣宿帳)第1、3巻、豊橋市「三川宿本陣資料館」2007(2011年)
 島田市史編纂委員会編「島田市史資料」第6巻、1962年
- 〔自治体史〕
 静岡県編「静岡県史」(通史編2(中世))1997年
 島田市史編纂委員会編「島田市史」(下巻)1973年
 水戸市史編纂委員会編「水戸市史」(上巻)1963年
 四日市市編「四日市市史」第16巻「通史編(古代・中世)」1995年
- 〔展示図録・報告書〕
 朝霞市博物館編「旅」(道中日記の世界)第9回企画展、2001年
 飯綱町教育委員会「いづな歴史ふれあい館」(開館十周年記念特別展「北国街道と牟礼宿」)2008年
 川崎市市民ミュージアム編「東海道宿駅制度400年記念 東海道」(日本橋として)川崎宿(1)2001年
 土浦市立博物館編「祈る集う巡る」(信仰と旅の民俗誌)土浦市立博物館第28回特別展「2009年」
 東京都江戸東京博物館「東京新聞編」(参勤交代)「巨都市江戸のなりたち」1997年
 特別展「江戸四宿」(特別展)「江戸四宿」1994年
 長野県木曾郡木祖村教育委員会編「木曾のお六」1977年
 長野市教育委員会「文化財課松代文化施設等管理事務所編」(大名の旅 松代藩の参勤交代)2011年
 豊橋市「三川宿本陣資料館」(豊橋市「三川宿本陣資料館」展示案内)「東海道」(三川宿本陣旅籠屋)2006年
 横浜市歴史博物館「横浜ふるさと歴史財団編」(東海道と神奈川宿)企画展「1996年」

◆ご協力いただいた機関

(五十音順)

- 石山寺
- 伊那市教育委員会
- 伊那市立高遠町歴史博物館
- 神奈川県立歴史博物館
- 草津市
- 草津市立草津宿街道交流館
- 国立国会図書館
- 国立歴史民俗博物館
- 堺市博物館
- 清浄光寺(遊行寺)
- 善教寺
- 東京都立博物館
- 東京都江戸東京博物館
- 東京都立中央図書館
- 鳥取県立博物館
- 豊橋市三川宿本陣資料館
- 長和町教育委員会
- 三重県立美術館
- 四日市市立博物館

◆企画展

おかね 道中記

―旅で使う貨幣―

- 会期／2012年11月10日(土)～2013年5月12日(日)
 会場／日本銀行金融研究所 貨幣博物館
 電話／03-3277-3037 (直通)
 住所／〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町1-3-1 (日本銀行分館内)
 ホームページ／<http://www.imes.boj.or.jp/cm>
 発行／2012年11月10日
 編集・企画／関口かをり 湯川紅美 山田真理子



貨幣博物館

日本銀行金融研究所
CURRENCY MUSEUM

